

(五)

「こう水の原いんは
山にふつた雨水が
上流から一気に
おしよせるからだ」

「川の流れを
変える方法を

考えてみよう」

「上流の山に
木をたくさん植えれば
そこに水がすいこまれ、
てっぽう水も

防ぐことができるぞ」

さつそく明善は、

植林（木を植え育てること）

の計画を考え始めました。

そして、いろいろな

調査のすえに

あばれ天竜をしずめる

もう一つの答えが

実は上流の山にも

あることが
わかつたのです。



(六)

しかし、木を植える事業にまで手を出すとなるとのこりのざいさんをすべてさし出し

ふたたび政府の

きよかをえるしか

ありませんでした。

かくごを決めた明善は、

ついに当時の

大臣だった

大久保利通に面会し、

あばれ天竜をしずめる

治山治水（山と川を整びする）

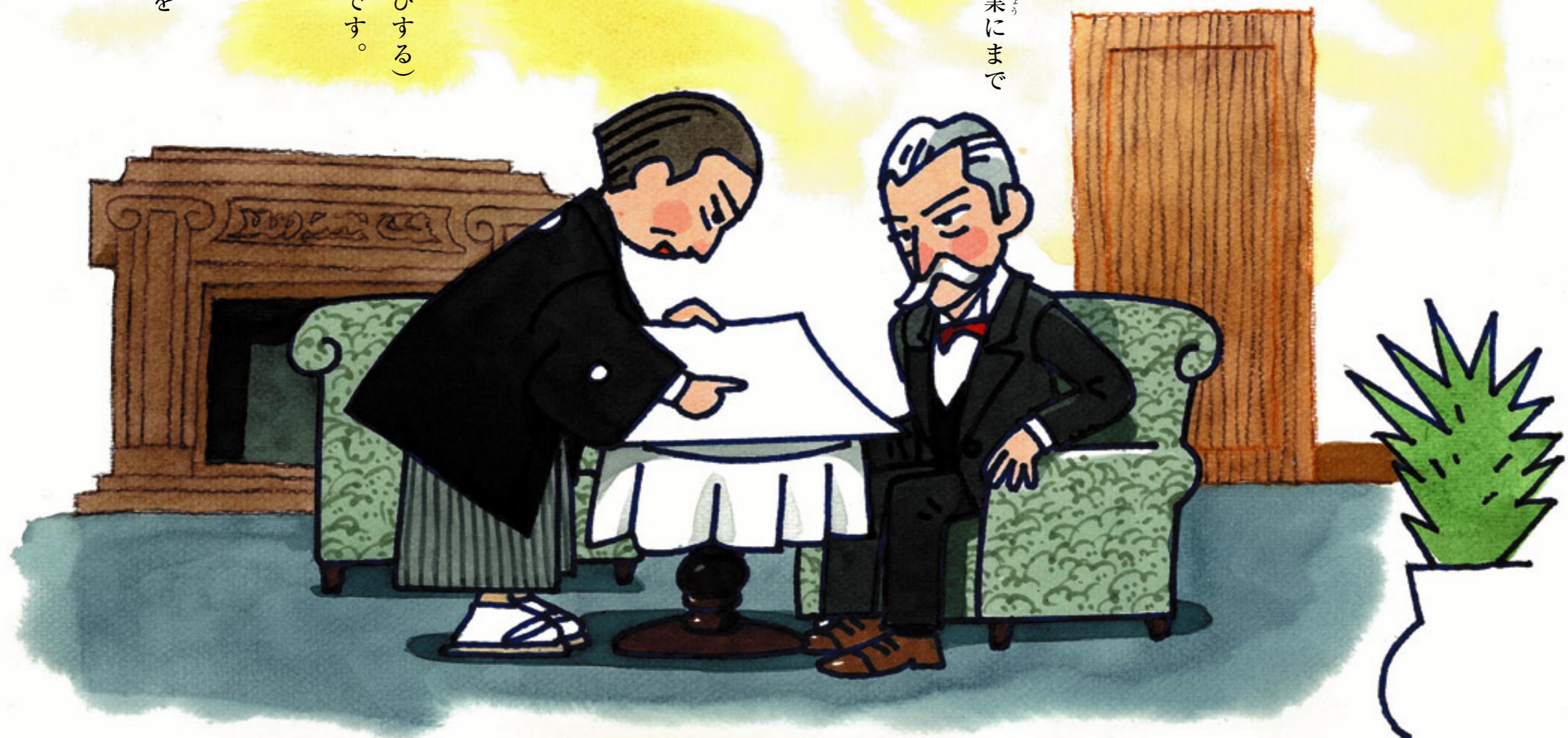
計画をもうし入れたのです。

大臣はそんな明善の

決意と情熱に

心を動かされ、

工事をまかせるきよかを
あたえたのでした。



(七)

ある日のことです。

ぼろをまとった一人の男が工事をやっているところにきました。

男はその日の朝、
静岡の監獄（今の刑務所）を

出てきたばかりで、ここで

はたらかせてほしい

と言いました。

反対する人たちも

多くいる中で、

明善は気にすることもなく
この男をやといました。

するところの男は

たいそうなはたらき者もので

明善ばかりでなく

まわりの人たちも感心しました。

このことがきっかけとなり

明善は「静岡勸善会」という

しせつを全国に

先がけてつくり、

罪つみをつぐなつて刑務所けいむしょを出た

人たちの仕事の世話をしたり

社会しゃかいに出る手助けてだすを

しました。



(八)

50歳を過ぎ、

明善はさらに木を植えることに

せいを出します。

作業にねつちゅうするあまり

山の中の大きな岩あなにたつた一人で

ねとまりすることもありました。

オオカミなどのけものもすむ山にこもって

作業に打ちこむ明善。

「木なんか植えてどうするで！」

とはじめはばかにしていた人も、

しだいに明善の考えの正しさに気づき、

おうえんするようになりました。

それから数年後、木が育ちはじめると、あばれ天竜も
少しづつおだやかな川にすがたをかえはじめました。



(九)

治水と治山に一生をささげた
金原明善。

多くの人々の協力をえて
ついにあばれ天竜を
しづめる大きな事業を
なしとげました。

今、わたしたちの町や田畠に
豊かなめぐみをもたらし、
天竜川はゆつたりと
流れています。

